

もくじ

\*文化庁に注文する\*

演劇を正課に……………浅利慶太……4  
 ——文部省教育関係者に望む——

「日本の歌、雑感」……………藤田まさと……6

百万都市の合唱組曲……………栗原一登……7  
 ——北九州市の試み——

祭りの映画作りの楽しさ難しさ……………星野 紘……8  
 ——祝島の神舞神事を撮って思う——

秘仏開扉……………真保 亨……10

我が町、我が村の文化行政  
 滋賀の「湖と文化の懇話会」 滋賀県教育委員会 ……11

文化庁ニュース

日本芸術院賞・恩賜賞が決まる……………12

優秀映画製作奨励金交付作品決まる……………12

昭和51年使用教科書等掲載補償金額決まる……………13

著作権審議会第20回総会開催……………13

昭和51年度文化財補助金交付決まる（最終回）……………13

昭和51年度日本語教育研究協議会開催さる……………14

鑑査官、計量行政審議会専門委員に就任……………15

長野県及び長野県蚕糸業審議会  
 文化庁・国語審議会等へ要望書……………15

文部省社会教育局のラジオ番組に文化庁次長ら出演……………15

国立演芸資料館の愛称について……………15

東京国立近代美術館で「浜田庄司展」……………15

文化庁買上優秀美術作品……………16

W I P O 記念切手発売さる……………16

文化庁の人事異動、柳川次長、文部省体育局長へ……………17

昭和52年度「美をもとめて」放送計画……………17

文化行政長期総合計画について①……………18

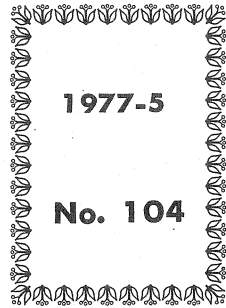
法人紹介  
 放送文化基金……………22

〔紹介〕  
 英国におけるオペラ養成の現状とその変革……………水島和夫……24

昭和52年度文化庁行事予定一覧……………28

文化財保護法教室(10)  
 重要無形文化財の指定とその保護(1)……………30

国立劇場ニュース……………31



表紙 斑猫図 竹内栖鳳筆  
 解説は17ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

# 祭りの映画作りの楽しさ難しさ

## 祝島の神舞神事を撮って思う



星野 紘  
(文化庁・無形文化民俗文化課)

テレビ、雑誌のグラビアをはじめ、昨今祭りの映像に接する機会が増えたように思う。ハミリ映写機などが一般化し、祭りは素人プロダクションのかっこうの素材となっているのだ。

祇園祭りや阿波踊りのように全国的に著名なものとは異なり、多くの人々が見たことも聞いたこともないという祭りや民俗芸能が各地に伝承されている。それは全く地域的なものである。いわゆる三大祭りというのが色々あって、それが正当だとは言えないことなどは祭りに携わる人達がいかに自分の土地中心に考えているか、他の土地のことはあまり知らないことをよくあらわしている。

つた程度で、いわゆる新聞雑誌の評論の対象にもならない。

昭和五十一年の夏の終り、山口県熊毛郡上関町祝島の数年ぶりの神舞神事が行われた。大分県の国東半島まで四九キロ、海路はるばる神様をお迎えし、数日間島人は神舞で明け暮れる。満艦飾りの漁船を数多くくり出し、神の渡御がはるかに続く海原を祭り空間と化すスケールの大きさ、神賑いの神舞に寄せる島人の愛着が延々四、五日にも及ぶという、手間ひまを惜しむ現代人には解しがたくなっている心ゆかしきなど、それに魅せられない人はいないだろう。上関町、それに国や県が金を出しあってこれを記録映画撮影した。数日間、製作関係者やカメラとともに祭りの次第や内容を追って海に陸に歩きまわったのであるが、何よりも印象深かったのは、神降し、渡御、神賑い(神舞)、神送りといった次第それにもまして、それをとりおこなう島人からの生き生きとした話や、彼等の感慨などであった。いやむしろ、この祭りの意味するところが、そこに端的に表明されているように思われた。島人との撮影打ち合せ会の折、島での諸行事が果て、いよいよ神送りの日の岸壁での光景は是非撮りおさめてほしいとの要望が出た。今しも船に乗り移ろうと

する御神霊捧持の神主や神舞のことごとくを演じ通してくれた神楽師に人々は涙を流して別れを惜しむという。ことに八十、九十の老人は、四、五年に一度のこの祭りにも二度と会えぬかもしれぬのの気持もあって、その感慨としおのものがあつたという。それから三十八番ばかりの神舞各曲が舞われるわけであるが、一つ一つの芸態がどうこうというにままして就中「荒神」の曲だけは舞踏え神楽と称し、願い出人分だけ、何十番と繰り返えし舞い添えられることはどうしても撮影記録しておかなければならぬことだ。聞くところ、二百何十人かの申し出があつて(一人当り五千円ずつの花代)、本来は一人分一番なのであるが、限られた祭り期間に消化すべく、数人分一番と省略せざるを得ないというのである。



祝島の神舞神事

ているのは、祝島の人間は隣り組村落等々のいわゆる住民組織、組が小さければ小さい程結束が固い、たとえればオリビックよりも団体的な方々を大切にする、そういう気風によるところ大なるのだ。一般通念とは反対なこの発想、祭りの運営組織の実際を知りたくさせるものである。

この上関町の祝島のことは、大分県

教委文化課入江英親氏の御著書「海を渡る祭」(慶友社)にも書かれている。さて、何度か祭りの記録映画作りにたずさわった者として、一、二気づいたことを記してみたい。

シナリオ作りとか撮影方針の検討会などでどこでも議論になっていると思うのは、監督、カメラマン等映画人と文化財関係者との記録についての考え方の食い違いである。映画人は文化財の人の発想は映画をおもしろくはないものにするとか嘆く。確かに我々は祭りが廃絶した将来、これが復活の教材にしたいのだとか、資料価値を高めたいたいなどと念じて祭りの次第の始めから終りまでを事細かに撮ることを要求しがちである。ところが映画作りの実際は、せいぜい三〇分ものとか一時間もの出来上りと相場が決まっており、単純に時間の量的比較をしてみるだけでも一日、二日ばかりの祭りが隔か隔までフィルムにおさまるわけがない。一方、映画会が始まるまで声がかかれば、期待に足取り軽々集まってくる見物人の習性は、それが記録映画であろうが劇映画であろうが、対象をどう見せるかの演出を要求しているということである。

映画スタッフはほとんど都会人であり、僻遠の地の祭りにはなじみがなく、一度や二度の体験ではなかなか理解し

難い。それでも委託されて作るという場合が多いのではないだろうか。前もっての勉強、地元関係者との綿密な打ち合せを怠ってはカメラアングルとかクローズアップといった映画技術がからまわりすることは当然である。

ところで、祭りの進行はいわば事件と同じでNGを出してもう一度というわけにはいかない。人の賑わっている所にカメラを据えている間に、ひっそりと別の所で神事としては大事なことが行われていたり、時に突然雨風に襲われて予定が狂ったり、あるいは前もっての資料が教えてくれなかった人々の表情や光景にいいなと思つても、カメラや照明が機敏に反応してくれなかつたりする。

また、祭りは、信仰の形態の古風が学術的に重要視され、芸能はじめ神賑いの様々な工夫が民俗芸術として驚嘆をも誘うのであるが、映画としてはむしろその表面の絵面を追うことになるだろうが、ここに文化的な祭りの場合、その土地以外の人には何をどうやっているのかすぐく了解しきれないところがある。確かに珍しさだけでも人をひきつけはするが、そのところ、いかに現代人に心あたりのある一般的事象として説明、表現するか、これがこの種の映画製作の苦勞の仕どころだと思

う。単に場面構成やナレーションを平

明にすればよいという、態度や姿勢だけの問題では片付かない。その祭りの実態にそぐわない通念や類型的表現で処理されては意味がない。祭りの映画だから、その祭式、舞いの手ぶりや歌声、あるいは作りもの風流の様子を焦点にして作成されるのは当然だが、だからといってそれ以外のことは入れてはならないなどとかたくなにならなくていいのではないか。それをとりおこなう人々の表情やそれを維持運営する組織や経済のこと、あるいは当面している問題点などの描写が、世間一般共通の関心とならなければならず、特殊に思える外見が、こういう側面からの目でなじみ深いものとなり得ると思う。いわばこういう風に踏み込むのはドキュメンタリー(映画)であり、何か文化財の記録映画はそれとは違うんだという風に考えられがちであるが、果たしてそれでいいものだろうか。少なくとも祭りの場合、現に生きている人々のとりおこなう祭りである限り、その側面に触れないで済みますというわけにはいかないのではないかと思

\* \* \*

編集後記

○演劇を正課に、との渋利氏の提言、文部省、教育委員会、学校関係者に特に読んでもらいたい。  
 ○文明懇でも梅原猛氏が、今、実社会に芸術が必要であることを唱えられ、梅原忠天氏も「学校教育の中に思いきって相対の芸術を導入せよ」と提案している。  
 ○歴史と文明の探求・下 一七八・一八〇頁。

○明治一代女、大利根月夜、岸壁の母、傷だらけの人生……と巻で庶民が口ずさむうたの作詞家、藤田正人氏、「文化」の輸出というのが持論だ。

○日頃、文化庁がお世話になり、御指導をいただいている栗原一登さん、北九州の八幡とは初耳。編集子是小倉なので嬉しくなった。氏のお嬢さんが栗原小巻さんだ。芸能界には福岡県をはじめ九州出身者が多い気がする。九州人は、芸能芸術向きか。  
 (大)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きようせい 営業課  
 TEL(〇三)二六八二二四一(代表)

「文化庁月報」五月号

(通巻第一〇四号)  
 昭和52年5月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区設が関3丁目2番2号  
 発行所 株式会社 きようせい  
 〒100 東京都千代田区銀座7丁目4番12号  
 本社 〒100 東京都千代田区西五軒町52番地  
 営業所 〒100 東京都千代田区西五軒町52番地  
 電話(〇三)二六八二二四一(代表)  
 振替口座 東京 九一六一番  
 印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)  
 年間購読料 一、八〇〇円